

地響きができる——と思つて戴きたい。

地響きといつても地殻変動の類のそれではない。

一定の間隔をおいてずん、ずんと肚に響く。所謂これは寢なのである。たかが畳で地響きとは大袈裟なことを——と、お考への向きもあるやもしれぬが、これは決して誇張した表現ではない。振動は、例えば戸棚の中の瀬戸物をかたかたと揺らし、建付けの悪い襖をぎしぎしと軋ませ、障子紙をびんびんと震わす程の勢いであつた。

子の刻である。

折からの雪が、しんしんと江戸の町に降り積もっている。

つまり冬場の深夜である。だから殆どの者は眠っていた。

当然音はなく、その所為か余計にそれは遠くまで響いた。

耳を澄ますと、その重低音の振動に合わせて、ふん、ふんという荒い息遣いらしきものも聞こえる。どこことなく家畜の鼻息にも似ている。音だけで判断するに、生臭き印象を抱きがちだが、それは単に音質の類似によつて記憶の嗅覚が喚起されただけである。

宇兵衛はしかし、幼い頃に嗅いだ牛の熱い吐息を夢現のうちに想起していた。

牛が、巨大な牛が表通りを過ぎて往く。牛歩というくらいだから速度もあんなものだろう。

しかし、それにしてはやけにでかい。多分小山程もある牛が——。

——牛ではねえな。

ここは曲がりなりにも生き馬の目を抜く江戸、しかも本所だ。

肥の香を漂わせた牛馬が通りを練り歩く訳もない。だいいち、小山程もある牛など存在する訳がないではないか——。

宇兵衛は漸く覚醒した。

——もののけか。

足洗い屋敷の大男でも歩き出したか。

宇兵衛は眼を開けた。やはり音はする。暗がり眼に眼が慣れて、宇兵衛はまず目前に朦朧と浮かぶ老婆の萎びた寝姿に一度落胆した。続いてその萎びた婆アが、地響きに合せて痙攣するが如く定期的に小さく飛び上がる様を確認した。まるで水揚げした瀬死の鯉である。しかも萎びている。宇兵衛は思わず吹き出しそうになり、一方でそれが夢などではないことを確信して戦慄した。

宇兵衛はそつと床を抜けた。雨戸の隙間を覗く。

それは牛などではなく——。

力士の群れだつた。

異様な光景という言葉は実によく耳にするが、実際にはそうお目にかかれるものではない。例えば滅多に発生しない珍奇な事態に遭遇したとしても、稀有なだけならばそれは単に珍しい光景である。否否珍しいでは済まされぬ、妖怪変化魍魎魍魎の類を目撃したのじや——というような場合は、これは既に幻覚の域に達しているから、つまりは怪奇であり非現実であり、これも異様とはいえない。だが——。

この場合は異様としかいいようがない。

雪の夜道である。

風景は時代劇などで見る江戸の町並みを思い描いて戴ければよい。もつとも劇中の閉塞感溢れるセツトの風景と比べると、実物は幾分開放感がある。建物自体もそれ程立派ではなく、どこまでも平屋ばかりだから空の面積が多く、見通しもいい。

その多めの暗い空には、ちらちらと白いものが舞っているという按配である。道は既に白で覆われている。

その大通りの真ん中を、大勢の力士が、相撲取りが、関取が、取的が角力が、横綱が大関が関脇が小結が前頭が十両が幕下が禪担ぎが、アンコ型が、所謂おすもうさんが、ざくざくと足並みを揃えて行進しているのである。

これで浴衣ゆかたでも着ていてくれたなら、まだしも許せたであろう。しかし、相撲取りの大群は裸の太った大男達が列をなして、夜の道を一生懸命に歩いているのだ。

肉襦袢にくじゆばんを着ている訳ではない。

草履ぞうりも鞋わらじも履はいていない。

身みに着きているのはマワシだけである。

宇兵衛は見逃してしまつたようだが、先頭の力士に到つては化粧マワシをつけている。

力士達は無言である。

しかし、号令もないというのに足並みは揃っている。

地響ぢひびきは——彼ら全員の躑むだつたのである。

それは——見事なものだつた。他に褒めようもなかつたのだけれど。寒空にむちむちした肌はほんのりと赤く染まり、頬は上気している。

歩調あだかが合あっているからふんふんという息遣いきぢいも揃そろっていて、ひとりひとりのそれは小さな音なのだが、恰あたも熊くまの鼻先に耳を近づけたような具合に大きく響く。それこそが獣の、巨大な牛の息遣いきぢいの正体まことだつたのである。

宇兵衛は、思わず息を呑んだ。

——ほんに生臭なまいかもしれん。

そう思つたからである。

夢や幻ではない。

宇兵衛は取り分け力士にトラウマを抱くような幼児体験をした覚えはないし、こともあろうに集団の力士に圧縮変換されるような潜在願望を持っているとも思えない。確かに、こんなものに象徴される潜在願望などを持って生きるなら死んだ方がマシである。

だからこれは現^{うつ}だ。

しかし、力士達はどことなくこの世のものは思えなかった。まあ百歩譲つてもこの世のものとは思えないおぞましい状況ではあるのだろうが、宇兵衛がそう思ったのは、そういう身も蓋もない根源的な問題とは無関係で、単に彼らを包む霞^{かすみ}のような霽^{もや}のような気体の存在に拠るところが大きかったようである。まるでソフトフォーカスをかけた実少女写真のように彼らは白く霞んでいて(いいたくはないが)美しかった。

気体の正体は水蒸気である。

ただでさえ体温の高そうなやつらがせつせと運動を繰り返しているのである。気温は低いが体温は牛馬の如きに上がっているに違いない。だから、中大した肺活量の彼らが吐き出す息は物凄く白かった。

体表の温度も著しく上がっているに違いない。躰^{からだ}自体からもほやほやと湯気が出ていたし、宙を舞う細かい雪片は、彼らの躰に触れるやいなや、一瞬のうちにその姿を儂^{はかま}い気体へと変えた。サーモグラフィでもあれば、そこにはさぞや鮮やかな朱色の巨体が記録されたことであろう。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。